

田中義廉編『日本史略』の基礎的考察

竹田進吾

はじめに

田中義廉(1841~1879)¹は、1873年(明治6)に刊行された師範学校編『小学読本』全4巻(文部省)の翻訳・翻案者として、国語教育の世界では有名である。それはこの『小学読本』が、明治初期に国語教科書として大変な普及を示したことによる。このように、田中義廉は国語教育の観点を中心として²、また田中芳男(1838~1916)³の弟として、さらに近年出版メディア史⁴において研究されてきた。

しかし本稿においては、田中義廉編の小学校歴史教科書『日本史略』『改刻日本史略』

¹田中義廉に関する概説として、村沢武夫『近代日本を築いた田中芳男と義廉』(田中芳男義廉顕彰会、1978年)等がある。田中義廉関係史料を簡単に紹介したものとして、「実弟田中義廉——最初の『小学読本』編集者」(『日本の博物館の父 田中芳男』飯田市美術博物館、1999年初版、2000年再版使用)がある。田中義廉が辞典項目に挙がっているものとして、村沢武夫編纂『信濃人物誌』(信濃人物誌刊行会、1962年)、唐澤富太郎編著『図説 教育人物事典——日本教育史のなかの教育者群像——』中巻(ぎょうせい、1984年)、『長野県歴史人物大事典』(郷土出版社、1989年)がある。

²国語教育の観点を中心とした概説的叙述として、古田東朔「田中義廉〈一〉国語教育者評伝」(『実践国語』第16巻第177号、穂波出版社、1955年)、古田東朔「田中義廉〈二〉国語教育者評伝」(『実践国語』第16巻第178号、穂波出版社、1955年)、古田東朔「田中義廉〈三〉国語教育者評伝」(『実践国語』第16巻第179号、穂波出版社、1955年)、古田東朔「田中義廉補遺」第21巻第238号(穂波出版社、1960年)があり、『小学読本』を中心に論じたものに、山口隆夫『『ウイルソンリーダー』と『小学読本』——比較言語文化的研究(一)——』(『言語文化論集』第IX巻第2号、名古屋大学総合言語センター、1988年)、山口隆夫「直訳と異訳——『ウイルソンリーダー』の翻訳(『ウイルソンリーダー』と田中義廉編『小学読本』(二))」(『東京工業大学 人文論叢』第14号、1989年)、桑原三郎「田中義廉の『小学読本』とウイルソン・リーダー——洋学派教科書の登場と退場——」(『近代日本研究』第5巻、慶應義塾福澤研究センター、1989年)、山口隆夫「GODの訳語について——『小学読本』の神観念(1)『小学読本』研究(3)」(『東京工業大学 人文論叢』第16号、1991年)、山口隆夫「宇宙創造神としての天津神——『小学読本』の神観念(2)『小学読本』研究(4)」(『東京工業大学 人文論叢』第17号、1992年)、山口隆夫「『小学読本』の理想的人間像(『小学読本』研究(5))」(『東京工業大学 人文論叢』第18号、1993年)、ドウトカ・マウゴジャータ「明治初期の教科書——田中義廉『小学読本』とWillson Reader——」(『大阪大学日本学報』第15号、1996年)がある。

³博物学者・物産家。農林水産業の近代化に貢献。1890年貴族院議員、1915年男爵。

⁴福岡勝「アーネスト・サトウと内藤伝右衛門の交流」(国文学研究資料館編『明治の出版文化』臨川書店、2002年)54頁ほか。

を検討する⁵。つまり、これまで国語教育者として語られてきた田中を、歴史教育者として再評価するということになる。『日本史略』は教科書史において、全5巻が「明治前期の主なる日本歴史の教科書」の一つとして挙げられているように、明治前期にかなり流布したとされている⁶。

本稿では、まず田中の経歴について先行研究をもとに確認する。次に『日本史略』『改刻日本史略』の所蔵状況を全国調査した結果について、書誌情報を中心に検討する。さらに『日本史略』『改刻日本史略』の歴史的位置を、その内容的な特質から明らかにする。

I 田中義廉の経歴

田中義廉（大介・義門・天口とも称した）の経歴における活動は多彩である⁷。和学・漢学に通じていたというが、基本的には洋学者（蘭学・英学）といえよう。英語は慶応義塾で学んだようである。1869年（明治2）3月には軍務官へ出仕して海軍操練所創設に関わった。1872年（明治5）には、文部卿大木喬任より請われて文部省に入省。「小学教則」制定、師範学校創設、小学校教科書編集に関わったといわれている。1873年（明治6）12月に文部省を辞めた後は、民間刊行の教科書を編集している。1878年（明治11）には教育社を設立し、社長となり、日刊教育新聞『内外教育新報』を創刊している。1879年（明治12）には麻布区会議員になり、初代議長としてコレラ予防に尽力したとされている。同年10月には脳病で不惑に至らず死去した。このように、田中は単なる教科書執筆者ではなく、海軍兵学寮教官、文部省官僚、教育社社長、地域政治の有力者の経歴を持っている。従来、田中の多岐にわたる活動は十分研究されていない。今後の課題であろう。特に研究史料として残存している『内外教育新報』の記事分析は、田中義廉研究に限らず、教育史研究上、重要である⁸。

田中が編集した教科書は『小学読本』『万国史略』『日本史略』『改刻日本史略』だけではない。ほかにも、『天然人造道理図解』（1870年）、『小学日本文典』（1874年）、『新訂日本小文典』（1877年）、『物理新編』（1877年）という理科・文法の教科書も執筆している。啓蒙的教科書執筆者といえよう。

⁵ 『改刻日本史略』は『日本史略』を改訂したものであり、あわせて基本的に一種類の教科書といえる。このほか、田中義廉には『万国史略』（1875～1876年）という外国史教科書も存在する。しかし本稿では日本通史の『日本史略』『改刻日本史略』のみ検討対象とする。

⁶ 仲新『近代教科書の成立』（日本図書センター、教育名著叢書①、1981年複製、初版は1949年）285～286頁。

⁷ 以下、経歴の概略は、注1 村沢武夫『近代日本を築いた田中芳男と義廉』、注2 古田東朔『田中義廉（一）国語教育者評伝』、「田中義廉（二）国語教育者評伝」、「田中義廉（三）国語教育者評伝」、「田中義廉補遺」による。

⁸ 田中義信も「最初の『小学読本』編纂者 田中義廉」（田中芳男を知る会平成15年度例会用資料、2003年8月6日）において、『内外教育新報』を分析することの重要性を指摘している。

II 『日本史略』の書誌的調査

まず『日本史略』の叙述形式と内容について確認しておこう。田中は緒言で、歴史書には「普通史」「開化史」「評論史」があるとし、自身は「普通史」を基本とし「稍開化評論ノ初学ニ要用ナル者ト、日事ニ欠ク可カラザルノ言ヲ採テ、之ヲ加添シ」⁹としている。実際、内容を見ていくと、『日本史略』の叙述は各天皇歴代名によって区切られており、基本的には天皇歴代史の体裁¹⁰といえるが、神武紀元による編年史の体裁も併用している。海後宗臣は、田中義廉の『日本史略』等の神武紀元による編年史を、「天皇歴代で編成した歴史教材の編集方法を改めようとした一つの考え方」と肯定的に評価している¹¹。田中自身は緒言において、神武紀元による編年史を採用した理由として、天皇歴代史では各歴史事象が現時点から何年前のことかわからないこと、「欧州ノ近古史」に編年史を使用する例が多いことを挙げている。神武紀元という限界はあるが、ヨーロッパの史書にならって編年史を採用した点に、洋学者としての田中の特質を認めることができる。

また、内容的には神武天皇以前、すなわち神代史叙述がないことを特徴として挙げる事ができる。神代史叙述排除は、「奇異怪談ニ係レル者ハ、悉ク之ヲ除ク」（緒言）方針を具現化したものといえる。

次に、「【資料】田中義廉編『日本史略』『改刻日本史略』所蔵一覧」を見て欲しい。田中義廉編『日本史略』『改刻日本史略』（それぞれ全5巻、続編全3巻）の所蔵状況を示した¹²。書誌情報を記したが、紙幅の都合上基本的な情報のみに止めた。『日本史略』『改刻日本史略』は、「【資料】田中義廉編『日本史略』『改刻日本史略』所蔵一覧」以外にも当然、日本全国にまだ存在しているだろう。それらの探索は今後の課題である。「【資料】田中義廉編『日本史略』『改刻日本史略』所蔵一覧」だけから流布や分布について論じることはできないが、裏表紙等にかかれた旧蔵者に関する情報も含め、この歴史教科書が東日本に広く流布したことは推測できる。実際、駒ヶ根市立図書館竹村文庫所蔵本には『日本史略』『改刻日本史略』が多数所蔵されている。竹村文庫本は長年月をかけて古本屋から購入したものが多くと考えられ¹³、一般に流布したことをうかがうことができる。

⁹ 『日本史略』巻一緒言。以下、緒言はみなここから。本稿において『日本史略』全5巻は、山梨県立図書館57を使用した。山梨県立図書館57の57は、後掲「【資料】田中義廉編『日本史略』『改刻日本史略』所蔵一覧」における番号である。以下、同じ。

¹⁰ 田中のいう「普通史」とは天皇歴代史を意味しているのだろう。

¹¹ 海後宗臣『歴史教育の歴史』（東京大学出版会、1969年初版、2000年第5刷使用）45頁。

¹² 田中は、以下に示すように『日本史略』の字引も編集している。田中義廉編『日本史略字引』全2冊（温故堂、内藤伝右衛門、1877年（明治10）1月25日版權免許、1877年（明治10）6月出版、1877年（明治10）12月15日版權免許（第2冊奥付）、1877年（明治10）12月出版（第2冊奥付）、国立国会図書館所蔵、YMD1062）。田中義廉編『日本史略字引』（温故堂、内藤伝右衛門、1877年（明治10）1月25日版權免許、1880年（明治13）11月29日再版御届、国立国会図書館所蔵、YMD1063）。ともに、国立国会図書館のホームページの近代デジタルライブラリーで閲覧可能。

¹³ 竹村文庫には、1993年4月23日と1995年6月4日に、竹村進が駒ヶ根市立図書館に寄贈した12,000冊以上の教科書類がある。

ただし、1888年（明治21）1月23日刊行本は、国立国会図書館⑧（大日本教育会書籍館旧蔵本）、東書文庫⑨（文部省旧蔵本）だけである。竹村文庫本にもない。竹村文庫本にないということからも、一般に流布しなかったと考えることができる。検定期（1886～1903年）には影響力を失っていたといえる。

さらに、表1～4を見て欲しい。「【資料】田中義廉編『日本史略』『改刻日本史略』所蔵一覧」をもとにして、『日本史略』『改刻日本史略』の網羅的な調査から判明した出版年次を示した。一種類の教科書がよく明治10年代を通して改訂されながら出版され続けていることがわかる。また、(注)に記したように、出版年次が一種類でないこともわかる。複数の出版・再版御届年次が存在している。

続いて表5・6を見て欲しい。「【資料】田中義廉編『日本史略』『改刻日本史略』所蔵一覧」には本文の丁数を省略したが、本文の丁数が変化している。『日本史略』は、1881年（明治14）9月1日3版以降、本文丁数が減少している。『日本史略』続編は、1882年（明治15）5月25日再版以降、本文丁数が減少している。それぞれの本文丁数は、これ以降『改刻日本史略』においても変化しない。前記以外の改訂時には本文丁数が変化していないため、丁数を変えない形で改訂作業が行われている。この場合、修正しなければならない丁のみ、版木を作り直せばいいことになる。また、表5・6により、奥付のない巻でもある程度刊行年次を確定できることとなった。管見の限りでは、表5・6に示した二種類の丁数以外の丁数は存在しない。

田中義廉は1879年（明治12）10月3日に死去している。つまりこれ以降の出版は、死後のこととなる。かなり売れ行きが良かったと考えられる『日本史略』は、1884年（明治17）以降『改刻日本史略』として改訂され、出版された。この改訂者が、高橋磯八郎である。高橋は、『文部省職員録』（明治17年2月2日改）¹⁴に、編輯局所属として出てくる。編輯局所属の文部省官吏が、民間刊行小学校歴史教科書の改訂を行っていることになる。

表1 『日本史略』全5巻出版年次

年月日	事項
1876年（明治9）9月1日	版權免許
1877年（明治10）1月20日	出版
1879年（明治12）4月20日	再版御届
1881年（明治14）9月1日	3版御届

(注) 駒ヶ根市立図書館⑧（巻5）は1876年（明治9）11月出版。駒ヶ根市立図書館⑨（巻5）、上越教育大学附属図書館⑩（巻1）、東書文庫⑪（巻5）は1879年（明治12）2月19日再版御届。

¹⁴ 全8冊、国立国会図書館所蔵、YDM5836。国立国会図書館のホームページの近代デジタルライブラリーで閲覧可能。第1冊（明治17年2月2日改）の33頁。

表2 『日本史略』続編全3巻出版年次

年月日	事項
1877年(明治10)11月15日	版權免許
1877年(明治10)12月	出版(巻1・2)
1879年(明治12)1月	出版(巻3)
1882年(明治15)5月25日	再版御届

(注) 国立教育政策研究所③(巻2)は1878年(明治11)3月出版。

表3 『改刻日本史略』全5巻出版年次

年月日	事項
1883年(明治16)12月15日	版權免許
1884年(明治17)2月	出版(巻1・2・3)
1884年(明治17)4月	出版(巻4・5)
1888年(明治21)1月11日	訂正再版御届
1888年(明治21)1月23日	出版

(注) 駒ヶ根市立図書館31(巻3), 東書文庫52(巻1~5.検定申請本)は1884年(明治17)4月出版。

表4 『改刻日本史略』続編全3巻出版年次

年月日	事項
1883年(明治16)12月15日	版權免許
1884年(明治17)4月	出版
1888年(明治21)1月11日	訂正再版御届
1888年(明治21)1月23日	出版

(注) 駒ヶ根市立図書館38(巻1)は1884年(明治17)11月26日再版御届, 1884年(明治17)12月25日出版。

表5 『日本史略』本文丁数の変化

本文丁数 巻名	1877年初版, 1879年再版	1881年9月1日3 版以降
『日本史略』一	46	40
『日本史略』二	50	44
『日本史略』三	48	42
『日本史略』四	49	43
『日本史略』五	53	46

表6 『日本史略』続編本文丁数の変化

本文丁数 巻名	1877年・1879 年初版	1882年5月25日 再版以降
『日本史略』続編一	47	40
『日本史略』続編二	46	40
『日本史略』続編三	59	51

Ⅲ 『日本史略』の歴史的位罜

まず、『日本史略』のなかの北条時宗（1251～1284）叙述を見て欲しい。「蒙古襲来」叙述のなかの時宗叙述は、執筆者の対外認識を理解する上で重要である。時宗の対外的に武断的な対応をどう評価しているかが問題となる。

議者多ク時宗（北条氏一竹田注）ノ功ヲ賞ス、蓋シ当時ノ人心皆是ノ如キカ、彼ノ使ヲ却ケテ報セス、我亦曲無シト為ンヤ、其兵ヲ以テ来リ犯スニ於テハ彼固ヨリ罪アリト雖トモ、使人ヲ誅戮スルカ如キ、其暴亦謂フ可カラス、時ニ颶風ニ遇ヒ、戦闘俄ニ休スルヲ得タルハ、偏ニ僥倖ト謂ハンノミ、若シカ戦数回ニ至ラハ、彼ヲ追攘スルヲ得ルトモ、又我邦数万ノ生靈ヲ損害セサルヲ得ス、然レハ時宗何ヲ以テ、其罪ヲ贖フヲ得ンヤ¹⁵

これは、筆者が近代日本の小学校歴史教科書を、国定期以前、国定期と網羅的に調査してきたなかで、小学校歴史教科書上にあらわれた唯一の本格的な北条時宗批判である。「彼ノ使ヲ却ケテ報セス、我亦曲無シト為ンヤ」と時宗の外交的無策を批判している。また「其兵ヲ以テ来リ犯スニ於テハ彼固ヨリ罪アリト雖トモ」と、「襲来」してきた元を批判しつつも、「使人ヲ誅戮スルカ如キ、其暴亦謂フ可カラス」と時宗の元使殺害を批判している。さらには「時ニ颶風ニ遇ヒ、戦闘俄ニ休スルヲ得タルハ、偏ニ僥倖ト謂ハンノミ、若シカ戦数回ニ至ラハ、彼ヲ追攘スルヲ得ルトモ、又我邦数万ノ生靈ヲ損害セサルヲ得ス、然レハ時宗何ヲ以テ、其罪ヲ贖フヲ得ンヤ」と暴風雨がなかった場合の損害から時宗を批判している。正当な批判的歴史認識といえよう。このような評論的叙述は、当時の小学校歴史教科書にはある程度存在した。

田中の『日本史略』以外にも、近代日本の小学校歴史教科書のなかで、北条時宗を肯定するための前提としての批判的内容が載ることはあった。管見の限りでは次の計二点を挙げられる。

義公（徳川光圀一竹田注）曰、時宗（北条氏一竹田注）元使ヲ斬ル、或ハ疑フ此レ

¹⁵ 『日本史略』巻四6丁裏～7丁表。

激シテ其兵ヲ速クナリ、曰然ラス、彼レ強大ヲ挟ミ以テ我ニ臨ム、我レ屈事セハ、將ニ我ヲ陵辱セントス、時宗其使ヲ戮シ威ヲ揚ク、其挙甚タ善シ、彼怒ヲ洩サントス、我固ヨリ備アリ、故ニ元主卒ニ志ヲ得ルコト能ハス、神明ノ祐ニ由ルト雖、亦時宗堅忍不拔ノ志ト、防御宜キヲ得ルトノ致ス所、其功亦偉ナラスヤ¹⁶

ここには徳川光圀（1628～1700）が言ったという形で、「時宗元使ヲ斬ル、或ハ疑フ此レ激シテ其兵ヲ速クナリ」と、時宗の元使斬殺が元の「襲来」を早めたのではないかという点からの批判的内容があるが、これはその後の時宗賛辞の前提でしかない。

抑今度ノ事タル世界第一ノ大国猛將ヲ敵ニ受ケ、幸ニ戦ヒ勝チテ又後害ヲモ貽サザリシハ実ニ僥倖ノ事ナリキ。近世ノ人或ハ時宗（北条氏一竹田注）ガ使者ヲ斬リ戦端ヲ開キシヲ譏リテ「盲人蛇ニ畏レザル」ニ比スル者ハ亦誤レリ。当時元ノ強大ナルコトハ早く我が国人ノ知ル所ニシテ、加フルニ文永ノ戦ヒ頗難渋ナリシカバ、人皆畏レヲ抱キタリシコト当時ノ記録ニ明カナリ。然リト雖当時ノ事情ヲ見ルニ若シ属国トナラザレバ必戦ハザル可カラズ。寧戦ヒテ死ニ尽クルモ甘ンジテ属国トナラザルハ我が国人古来ノ氣風ナリ。戦端ハ我レヨリ開キシニアラズ、時宗ガ已ムヲ得ズシテ戦ヒシコトハ読者宣シク前ノ手續キヲ反覆シテ之ヲ了解スベシ。¹⁷

ここには時宗の元使殺害による開戦を「盲人蛇ニ畏レザル」とたとえているが、これを誤りとし、その後は元と戦わなければならない必然性の強調となっている。死んでも属国とはならないように戦うのが「我が国人古来ノ氣風」といったあたりは、検定期の歴史教科書であることを感じさせる。「近世ノ人」には、田中義廉のことも念頭に置かれていた可能性が高い。前記した南摩綱紀の『増補内国史略』の時宗叙述も含め、明治10～20年初頭において、歴史教科書執筆者に、実は否定的側面を含む時宗の武断的対応を、なんとしても肯定・弁護する必要があると認識されていたことがわかる。教科書叙述のなかで、教科書執筆者が、時宗像をどう描くかでせめぎあっていたのである。

管見の限りでは近代日本の小学校歴史教科書のなかに時宗批判が載るのは、この三例しか知らない。しかも肯定するための前提としての批判的叙述ではなく、まともに批判を展開しているのは、近代日本の小学校歴史教科書のなかでは田中の『日本史略』のみなのである。これは、近代日本小学校歴史教科書のなかの北条時宗像としては、極めて冷静な歴史叙述と評価できる。たとえば明治10年前後の小学校歴史教科書を見ても、「時宗沈毅ニシテ器略多シ、其外寇ヲ却ケ、永ク西陲ノ虞無ラシムル者ハ、時宗ノカナリ」¹⁸

¹⁶南摩綱紀原著・関、河村与一郎増補「頭書音訓増補内国史略卷之三」『増補内国史略』亨（松田正助、1876年（明治9）5月8日版權免許、1878年（明治11）3月1日発行、国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館所蔵）49丁裏～50丁表。

¹⁷新保磐次著『小学日本史』第三（原亮三郎、金港堂蔵版、1889年（明治22）2月25日訂正再版、検定合格本、国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館所蔵）28丁裏～29丁表。

¹⁸川島楳坪編、那珂梧楼・木原老谷関『古今紀要』亨 卷二（発兌書林長島為一郎・山中市兵衛・回春堂、埼玉県出版、1879年（明治12）1月版權所有、国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館所蔵）

と、北条時宗を称賛しているものが多いのである。

『日本史略』の時宗叙述は、その後刊行された『改刻日本史略』（1884年）でも修正されない。検定期初期の検定申請本（東書文庫⑤）¹⁹でも、時宗叙述に調査者の付箋はついていない。つまり「調査済教科書表期」（1880～1886年）²⁰から検定期初期にかけて、この時宗叙述は文部省の教科書調査で問題となっていない。これらから、時宗像をどう描くかという、教科書叙述上における小学校歴史教科書執筆関係者のせめぎあいのなかで、時宗像は均一化していったと想定できる。

ただし歴史教科書以外では時宗批判が存在する。たとえば田口卯吉『日本開化小史』の以下の叙述である。

吉田賢輔先生曰く後の史家時宗（北条氏一竹田注）が元使を斬るを以て国家に功あるが如く論ずるハ誤まれり、一民外国に害を受くるも之を不問に置かざるは独立国の職務なり況んや国書を齎したる欽差大臣に於てをや、彼れ好を求む我亦独立国の当然の礼を以て之に答ふべし、使臣を斬るハ自ら国体を汚すなり²¹

ここには、近代の「文明国」どうしの礼儀として、元使斬殺の否定をみることができると。田口卯吉（1855～1905）と田中義廉の関係はわからないが、『日本開化小史』の刊行は、1877年（明治10）9月に始まり、『日本史略』は1877年（明治10）1月20日に出版されていることからすれば、『日本史略』の方が早く書かれているようだ。吉田賢輔（1837～1893）²²は慶応義塾の教授になっていることからすると、慶応義塾のネットワークで吉田と田中は交流があった可能性もある。また、吉田は1872年（明治5）から、大蔵省翻訳局で英書（経済書）を生徒に教授している。この時期、翻訳局上等生徒に田口卯吉がいる。断片的ではあるが、田口の歴史認識形成に吉田の影響を認めることができる。

この北条時宗叙述以外にも、歴史教科書としての『日本史略』の特質はみてとれる。以下、南北朝動乱の主要登場人物である、後醍醐天皇（1288～1339）・楠木正成（？～1336）・新田義貞（1301～1338）・足利尊氏（1305～1358）の順に関係叙述をみってみる。

蔵)

¹⁹東書文庫52についている文部省教科書調査の付箋については、拙稿「田中義廉編『改刻日本史略』への文部省付箋」（『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第52集、2004年）で紹介した。

²⁰「調査済教科書表期」という用語は筆者の造語である。教科書の内容統制に注目した場合、「開申制」「認可制」という採択段階の用語より『調査済教科書表』が刊行され、有効性を持っていた時期全体を通して示す用語として適当であると考えられる。これは、國次太郎が「調査済教科書表の時代」と称しているのを受けたものである（『検定制度の成立と算術教科書』、『研究論文集』第24集（Ⅱ）、佐賀大学教育学部、1976年、162頁）。

²¹『明治文学全集 14 田口鼎軒集』（筑摩書房、1977年初版、1983年初版第2刷使用）23頁。

²²吉田賢輔に関する文献として、由良君美「ある儒者の転身——吉田賢輔の場合——」（『国文学——解釈と教材の研究——』第21巻第10号、学灯社、1976年）がある。以下、吉田に関する叙述は由良論文による。また、注1唐澤富太郎編著『図説 教育人物事典——日本教育史のなかの教育者群像——』中巻に、吉田賢輔が項目として挙がっている。

初メ帝（後醍醐天皇—竹田注）ノ事ヲ挙クルヤ，専ラ戦士ニ任シ，預メ賞賜ヲ勅約スル所アリ，既ニ大統ニ迫テ多ク前約ニ背キ，或ハ肆ニ食封ヲ削リ，嬖幸ニ与フ，是ニ於テ武士皆政道ノ正シカラサルヲ悲リ，皇家ヲ厭テ武家ヲ慕フニ至ル，宜哉，王政ノ持久セサルコト²³

正成（楠木氏—竹田注）ノ人ト為リ，智勇倫ヲ絶シ，上ニ奉スルヤ，忠貞ヲ竭クシ，身ヲ守ルニ儉謹ヲ以テス，実ニ本朝古今ノ良材ト謂フ可シ然レトモ器宇狭隘ニシテ，下ヲ使フコト酷ク厳明ナリ，是ヲ以テ戦国英邁ノ士多ク使役サルハヲ厭フ，此故ニ毎戦必ス捷ツト雖トモ，戦士漸ク喪亡ス，蓋シ朝廷ノ衰政ニ因ルト雖トモ亦英雄ノ心ヲ攬ルノ術ニ欠クル無キニアラスヤ²⁴

義貞（新田氏—竹田注）元弘ノ初ヨリ勅ヲ奉シテ賊魁ヲ誅シ，衰朝ヲ興起シテ治ヲ万国ニ致セリ，其功勳孰カ之カ右ニ出テン，然ルニ朝廷ノ恩賞遥ニ足利氏ニ及ハス，従士多ク不平ナリ，義貞之ヲ意トセス，曾テ箱根ノ敗ニ将士皆其独立ヲ勸ム，義貞聴カスシテ曰ク，我賊軍ノ熾ナル故ヲ知ラサルニ非ス，然レトモ，故ナクシテ，君ニ背クニ忍ヒス，且我不義ニシテ榮エンヨリ，寧ロ義ヲ取テ死センニ若カスト，終ニ鞠躬シテ王事ニ死ス，嗚呼義貞ノ如キハ，純乎タル忠臣ト謂フ可キナリ²⁵

尊氏（足利氏—竹田注）北帝ヲ擁立シテ皇統正閏ノ分ヲ乱リ，凶焰益熾ニシテ再ヒ京師ヲ陥レ，後醍醐帝ヲ幽シ，皇太子ヲ弑シ，又其父子兄弟相輯睦スルコト能ハス，日ニ干戈ヲ用キテ更ニ相吞噬シ，京師戦争ノ区ト為ルコト二十余年，海内之レカ為メニ寧歳ナシ，其罪惡貫盈神人ノ共ニ憤ル所ナリ，然レトモ其人ト為リ，度量恢弘ニシテ權略アリ，生涯女色ニ耽ラス，士ヲ愛シ，施ヲ好ム，金帛ヲ視ルコト土芥ノ如シ，地ヲ得レハ悉ク戦士ニ与フ，是ヲ以テ将士多ク其用ヲ為セリ²⁶

これらには，後醍醐天皇の政治に対する批判²⁷，楠木正成の大将としての資質批判²⁸，新田義貞の全面的称賛²⁹，足利尊氏の大将としての資質肯定が述べられている。このうち後醍醐天皇の政治に対する批判，新田義貞の肯定的叙述は，明治 10 年代の歴史教科

²³ 『日本史略』卷四 17 丁表～裏。

²⁴ 『日本史略』卷四 18 丁裏～19 丁表。

²⁵ 『日本史略』卷四 20 丁裏～21 丁表。

²⁶ 『日本史略』卷四 26 丁表～裏。

²⁷ 明治 20 年以降における後醍醐天皇像の変容に関しては，岩井忠熊「近代日本の後醍醐天皇像」（岩井忠熊『近代天皇制のイデオロギー』新日本出版社，1998 年，初出は 1992 年），伊藤喜良「後醍醐天皇——「捏造」された聖帝像」（『歴史評論』第 651 号，2004 年）で概説されている。

²⁸ 近代以前から近代にかけての楠木正成像の変遷を概説したものに，海津一朗「楠木正成と日本人」（海津一朗『楠木正成と悪党——南北朝時代を読みなおす』ちくま新書，1999 年，初出は 1989 年）がある。

²⁹ 現在の学問的な成果において，新田義貞は「時代錯誤の東国武士」とされている（注 28 海津著書 80～82 頁）。

書に一般的にみることができる³⁰。しかし、楠木正成の大将としての資質批判、足利尊氏の大將としての資質肯定叙述は異例である。楠木正成批判と新田義貞称赞叙述には、検定期初期の文部省教科書調査で付箋がつけられたが³¹、その後刊行された東書文庫³²で修正されていない。後醍醐天皇批判叙述には付箋はないが、一部に朱で点がある³²。足利尊氏の肯定叙述にも付箋はないが、一部に朱でしるしがある³³。しかし、ともに東書文庫³³において修正されていない。

これらの南北朝動乱関係者叙述では、楠木正成の大将としての資質批判が、検定期初期の文部省教科書調査で付箋がつけられ、問題視されたことが重要である。結果的に修正されなかったが、検定制による内容統制が実態として出現していることになる。

このように、北条時宗叙述、南北朝動乱関係者叙述、そして「廢帝」叙述から、田中義廉の歴史認識の特質を指摘できる。このうち「廢帝」叙述とは、『日本史略』の目次・見出し部分において、淳仁天皇（733～765）・仲恭天皇（1218～1234）を「廢帝」としている叙述のことである。この「廢帝」叙述は、「調査済教科書表期」に統制されて、修正されていく³⁴。

以上検討してきたことから、田中義廉編『日本史略』は歴史的にどう位置づけることができるだろうか。第一に、北条時宗叙述、南北朝動乱関係者叙述、そして「廢帝」叙述にみることできた、政治的・思想的に冷静な立場からの叙述を、歴史的特質として挙げるができる。これに関わり叙述形式の特質として、単なる天皇歴史史ではなく、神武紀元という限界を含んではいるが編年史を採用している点を、内容的特質としては神代史排除を挙げられる。

第二に、これらの特質をもった歴史教科書が、明治 10 年代に東日本を中心にかなり流布したということが重要である。すなわち『日本史略』は、検定期初期にはもう流布しなかったが、注目すべきことに「自由発行期」（1872～1880 年）³⁵・「調査済教科書表期」・検定期と、改訂されながら学校教育社会に存在し続けた貴重な歴史教科書なのである。田中義廉は 1879 年（明治 12）に死去している。「調査済教科書表期」において、文部省地方学務局が取調掛による教科書調査の結果を各府県に通知し始めたのは、1880 年（明治 13）8 月 30 日であり、田中死去後のことであった。そして 1884 年（明治 17）以降刊行された『改刻日本史略』には、検定期初期に文部省教科書調査で付箋がつけら

³⁰ たとえば、椿時中編輯『小学国史紀事本末』中巻（出版人山中市兵衛、前田円、1882 年（明治 15）5 月 29 日版權免許、1882 年（明治 15）8 月出版、上越教育大学附属図書館所蔵、小山家文書）には、見出しに「後醍醐ノ失政」（12 丁表）、「新田氏ノ殉節」（15 丁裏）とある。

³¹ 東書文庫⁵²巻四 16 丁裏、18 丁表。

³² 東書文庫⁵²巻四 15 丁表～裏。

³³ 東書文庫⁵²巻四 23 丁表～裏。

³⁴ 『日本史略』は『調査済小学校教科書表』第 14 号（1882 年（明治 15）10 月 31 日）で、巻二と続編巻三が「小学校教科書并ニ口授ノ用書ニ採用スヘカラサル分」とされた。「廢帝」叙述がその一因となっている。筆者は、2003 年 9 月 21 日に同志社大学で開催された教育史学会第 47 回大会において、「文部省の歴史認識統制——「調査済教科書表期」から検定期初期の分析——」という題目で、個人発表を行った。ここで「廢帝」叙述にも触れた。この発表をもとにした別稿を予定している。

³⁵ 「自由発行期」の意味するところは、注 19 拙稿注（1）参照。

れた。このように田中死後、文部省による内容統制を受けつつ、長期間にわたり学校教育社会に存在し続けた点が重要である。また、北条時宗叙述で検討したように、小学校歴史教科書執筆関係者のせめぎあいのなかでの、内容的均一化という局面も存在した。

おわりに

本稿では、『日本史略』『改刻日本史略』の所蔵状況を全国調査した結果について、書誌情報を中心に検討するとともに、『日本史略』『改刻日本史略』を内容的な特質から歴史的に位置づけた。ただし、近代初頭の歴史教科書に多大な影響を与えたと考えられている、『大日本史』『日本外史』『国史略』のような近世史書等との内容的な系譜関係については言及できなかった。また、『内外教育新報』の記事分析についても今後の課題としたい。

最後に、田中義廉と甲府の出版社主二代目内藤伝右衛門（1844～1906）³⁶との関係に触れておきたい。恐らく、二代目内藤伝右衛門は外国史・日本史の小学校用教科書執筆者を探していて、田中は外国史・日本史の小学校向け教科書を書きたいという意思があり、両者の思いが一致する形で、『万国史略』（1875～1876年）、『日本史略』（1877年）の刊行となったのだろう。二代目内藤伝右衛門からすれば、文部省を辞めた啓蒙的教科書執筆者田中義廉は魅力的な人材だったろうし、田中からすれば、師範学校編（大槻文彦編）『万国史略』（文部省、1874年）、師範学校編（木村正辞編）『日本略史』（文部省、1875年）の刊行に対抗する意思があったのかもしれない。対抗する意思を推測したのは、第一にこの刊行状況を見てみると、文部省本刊行の直後に田中本が刊行されていること。第二に『小学読本』の刊行状況から、ドットカ・マウゴジャータが「田中と文部省の意向との間にくいちがいがあったとも推定されるが、いまのところ明らかではない」³⁷としていること。第三に古田東朔が「田中には一方かなり独断専行的な性格も存していただろうということは、かつて見たところからも容易に判断される場所である。そして、当時教科書編集を忽卒の間になしとげたという点から見ても、田中義廉という人物は、細かい欠点は問題にせず実行していくという性格の持ち主であり、一種の野心家であったらうと思われる」としていることからである³⁸。

具体的に二代目内藤伝右衛門と田中義廉のネットワーク³⁹に関わる人物としては、永峰秀樹（1848～1927）を挙げることができる。永峰は『日本史略』巻五に跋を書いている

³⁶ 万春の夫である内藤伝右衛門を初代として数えている。

³⁷ 注2 ドットカ・マウゴジャータ論文 173～174頁。

³⁸ 注2 古田東朔「田中義廉補遺」65～66頁。

³⁹ このあたりの事情については、注1 村沢武夫『近代日本を築いた田中芳男と義廉』、注2 古田東朔「田中義廉（二）国語教育者評伝」、注4 稲岡勝「アーネスト・サトウと内藤伝右衛門の交流」、清雲俊元「内藤伝右衛門」（『郷土史にかがやく人々』第三集、青少年のための山梨県民会議、1970年）、保坂忠信「永峰秀樹と洋学一家」（『郷土史にかがやく人々』第六集、青少年のための山梨県民会議、1973年）、谷口彩子「『経済小学 家政要旨』の刊行事情と内藤伝右衛門」（『日本家政学会誌』第50巻第1号、1999年）を参照した。

る。永峰は二代目内藤伝右衛門の出版社から『経済小学 家政要旨』等を刊行している。この永峰の兄が小野泉(1830～1884)であり、小野は二代目内藤伝右衛門やその養母万春(1823～1901)と親交があった。そして田中と永峰はともに海軍兵学寮関係者であった。また、アーネスト・サトウ(1843～1929)は内藤万春の友人として田中義廉を挙げている⁴⁰。こうしてみると、知識人のネットワークの交流点として、初代内藤伝右衛門の妻万春の重要性が浮かび上がってくることを、最後に指摘しておきたい⁴¹。

【資料】田中義廉編『日本史略』『改刻日本史略』所蔵一覧

(国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館)

①田中義廉編輯『日本史略』全5巻(内藤伝右衛門出版、東京内藤伝右衛門支店発兌、1876年(明治9)9月1日版權免許、1877年(明治10)1月20日出板、1879年(明治12)4月20日再版御届、定価1円(朱印。全5巻での意だろう)、K110.2/72/1(巻一～三)、K110.2/72/2(巻四・五)。奥付は巻五のみ)

②田中義廉編輯『日本史略』全5巻(内藤伝右衛門出版、東京内藤伝右衛門支店内藤泰次郎発兌、1876年(明治9)9月1日版權免許、1877年(明治10)1月20日出板、1879年(明治12)4月20日再版御届、1881年(明治14)9月1日三刻御届、定価1円(朱印。全5巻での意だろう)、K110.2/72a/1(巻一～三)、K110.2/72a/2(巻四・五)。奥付は巻五のみ)

③田中義廉編輯『日本史略』続編全3巻(内藤伝右衛門出版、内藤伝右衛門支店売払、1877年(明治10)11月15日版權免許、1877年(明治10)12月出版(巻一)、1878年(明治11)3月出版(巻二)、1879年(明治12)1月出版(巻三)、定価巻一・二20銭、巻三25銭、K110.2/73。巻一・二の表紙に「大日本教育会書籍館第二室」における所蔵番号を示す紙が貼られていて、「四函七架三〇一六号二冊」とある)一巻一・二と巻三は、別種の伝来本のようにだ。

④田中義廉編輯、高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』全5巻(内藤伝右衛門出版、1883年(明治16)12月15日版權免許、1884年(明治17)2月出版(巻一・二・三)、1884年(明治17)4月出版(巻四・五)、定価各巻20銭、K110.2/74/1(巻一～三)、K110.2/74/2(巻四・五)。巻一の内務卿大久保利通題辞1丁目表、巻二から五までは目録1丁目表に「東京図書館蔵」の朱印が押されている)

⁴⁰アーネスト・サトウ、庄田元男訳『日本旅行日記』1(平凡社、東洋文庫544、1992年)の1877年(明治10)4月20日条。

⁴¹注4 稲岡勝「アーネスト・サトウと内藤伝右衛門の交流」では、「二章 など益荒男と生れざりけむ—内藤万春伝」において、万春に注目することにより、内藤伝右衛門の出版活動の実態に迫ろうとしている。

⑤田中義廉編輯，高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』続編全3巻（内藤伝右衛門出版，1883年（明治16）12月15日版權免許，1884年（明治17）4月出版，定価65銭0，K110.2/75。奥付は巻三にしかない）

⑥田中義廉編輯『日本史略』続編全3巻（内藤伝右衛門出版，東京内藤伝右衛門支店内藤泰次郎発兌，1877年（明治10）11月15日版權免許，1877年（明治10）12月出版（巻一・二），1879年（明治12）1月出版（巻三），1882年（明治15）5月25日二刻御届，定価65銭（全3巻での意だろう），K110.2/76。奥付は巻三にしかない）

〈国立国会図書館〉

⑦田中義廉編輯『日本史略』全5巻（内藤伝右衛門，「紀元式千五百三十六年九月一日版權免許」，1877年（明治10）1月20日出版（以上奥付巻五のみ），YMD1051，マイクロフィッシュ。国立国会図書館のホームページの近代デジタルライブラリーで閲覧可能）

⑧田中義廉編輯，高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』全5巻，続編全3巻（内藤伝右衛門出版，山添栄助発売，1883年（明治16）12月15日版權免許，1888年（明治21）1月11日訂正再版御届，1888年（明治21）1月23日出版，検定合格本，定価各巻18銭，YMD1059，マイクロフィッシュ。全巻に奥付あり。表紙に「大日本教育会書籍館」の所蔵番号を記した紙が貼ってあり（全8巻），27函・5架・70号・8冊とある）

〈駒ヶ根市立図書館教科書資料室（竹村文庫）〉

⑨田中義廉編輯『日本史略』巻一（内藤書屋，1877年（明治10）1月20日出版，B3-528-822。奥付なし）

⑩田中義廉編輯『日本史略』巻一・二・三（内藤書屋，1877年（明治10）1月20日出版，巻一 B3-528-823，巻二 B3-528-828，巻三 B3-528-832。奥付なし）

⑪田中義廉編輯『日本史略』巻一（内藤書屋，1877年（明治10）1月20日出版，B3-528-824。奥付なし）

⑫田中義廉編輯『日本史略』巻一（内藤書屋，1877年（明治10）1月20日出版，B3-528-825。奥付なし）

⑬田中義廉編輯『日本史略』巻一（内藤書屋，1877年（明治10）1月20日出版，B3-528-826。題辞と序に乱丁がある。奥付なし）

⑭田中義廉編輯『日本史略』巻二（B3-528-827。奥付なし）

- ⑮田中義廉編輯『日本史略』卷二・三計1冊 (B3-528-829。奥付なし)
- ⑯田中義廉編輯『日本史略』卷三 (B3-528-830。巻末に「大日本東京府下通塩町拾壹番地書肆温故堂内藤泰次郎製本発兌之印」の朱印が押されている。奥付なし)
- ⑰田中義廉編輯『日本史略』卷三 (B3-528-831。奥付なし)
- ⑱田中義廉編輯『日本史略』卷四・五計1冊 (出版人内藤伝右衛門, 出版人文会舎, 山市兵衛, 山添栄助発兌, 1876年(明治9)9月1日版權免許, 「紀元二千五百三十六年第十一月出版」, B3-528-833。巻五のみ奥付あり) —⑳B3-528-825の巻一, ㉑B3-528-829の巻二・三と, このB3-528-833の巻四・五の全5巻全3冊が篠原類造旧蔵本といえる。
- ㉒田中義廉編輯『日本史略』卷四 (B3-528-834。奥付なし)
- ㉓田中義廉編輯『日本史略』卷五 (内藤伝右衛門出版, 東京内藤伝右衛門支店発兌, 1876年(明治9)9月1日版權免許, 1877年(明治10)1月20日出版, 1879年(明治12)4月20日再版御届, B3-528-835)
- ㉔田中義廉編輯『日本史略』卷五 (内藤伝右衛門出版, 東京内藤伝右衛門支店発兌, 1876年(明治9)9月1日版權免許, 1877年(明治10)1月20日出版, 1879年(明治12)2月19日再刻御届, B3-528-836)
- ㉕田中義廉編輯『日本史略』卷一 (内藤伝右衛門出版, 東京内藤伝右衛門支店内藤泰次郎発兌, 1876年(明治9)9月1日版權免許, 1877年(明治10)1月20日出版, 1879年(明治12)4月20日再版御届, 1881年(明治14)9月1日3刻御届, B3-528-837)
- ㉖田中義廉編輯『日本史略』卷一 (内藤伝右衛門出版, 1876年(明治9)9月1日版權免許, 1877年(明治10)1月20日出版, 1879年(明治12)4月20日再版御届, 1881年(明治14)9月1日3刻御届, B3-528-838)
- ㉗田中義廉編輯『日本史略』卷三 (内藤伝右衛門出版, 東京内藤伝右衛門支店内藤泰次郎発兌, 1876年(明治9)9月1日版權免許, 1877年(明治10)1月20日出版, 1879年(明治12)4月20日再版御届, 1881年(明治14)9月1日3刻御届, B3-528-839)
- ㉘田中義廉編輯『日本史略』卷四 (内藤伝右衛門出版, 東京内藤伝右衛門支店内藤泰次郎発兌, 1876年(明治9)9月1日版權免許, 1877年(明治10)1月20日出版, 1879年(明治12)4月20日再版御届, 1881年(明治14)9月1日3刻御届, B3-528-840)
- ㉙田中義廉編輯『日本史略』卷五 (内藤伝右衛門出版, 東京内藤伝右衛門支店内藤泰次郎発兌, 1876年(明治9)9月1日版權免許, 1877年(明治10)1月20日出版, 1879年(明治12)4月20日再版御届, 1881年(明治14)9月1日3刻御届, B3-528-841)

- 27 田中義廉編輯『日本史略』続編巻一（出版人内藤伝右衛門，内藤伝右衛門支店，1877年（明治10）11月15日版權免許，1877年（明治10）12月出版，定価20銭，B3-529-842）
- 28 田中義廉編輯『日本史略』続編巻二（B3-529-843。奥付なし）
- 29 田中義廉編輯『日本史略』続編巻二（内藤伝右衛門出版，内藤伝右衛門支店，1877年（明治10）11月15日版權免許，1877年（明治10）12月出版，定価20銭，B3-529-844）
- 30 田中義廉編輯『日本史略』続編巻三（内藤伝右衛門出版，内藤伝右衛門支店，1877年（明治10）11月15日版權免許，1879年（明治12）1月出版，定価25銭，B3-529-845）
- 31 田中義廉編輯『日本史略』続編巻三（内藤伝右衛門出版，内藤伝右衛門支店内藤泰次郎，1877年（明治10）11月15日版權免許（続編全3巻），1877年（明治10）12月出版（続編巻一・二），1879年（明治12）1月出版（続編巻三），1882年（明治15）5月25日2刻御届（続編全3巻），定価65銭（全3巻での意だろう），B3-529-846）
- 32 田中義廉編輯，高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』巻二（内藤伝右衛門出版，1883年（明治16）12月15日版權免許，1884年（明治17）2月出版，B3-530-847）
- 33 田中義廉編輯，高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』続編巻三（内藤伝右衛門出版，1883年（明治16）12月15日版權免許，1884年（明治17）4月出版，B3-530-848）
- 34 田中義廉編輯，高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』巻三（内藤伝右衛門出版，1883年（明治16）12月15日版權免許，1884年（明治17）4月出版，定価20銭，B3-530-849）
- 35 田中義廉編輯，高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』巻五（内藤伝右衛門出版，1883年（明治16）12月15日版權免許，1884年（明治17）4月出版，定価20銭，B3-530-850）
- 36 田中義廉編輯，高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』続編巻二（内藤伝右衛門出版，1883年（明治16）12月15日版權免許，1884年（明治17）4月出版，定価20銭，B3-531-851）
- 37 田中義廉編輯，高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』続編巻三（内藤伝右衛門出版，1883年（明治16）12月15日版權免許，1884年（明治17）4月出版，定価25銭，B3-531-852）—墨で表紙に「中等科第四級教理書」と書かれている。
- 38 田中義廉編輯，高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』続編巻一（内藤伝右衛門出版，1883年（明治16）12月15日版權免許，1884年（明治17）11月26日再版御届，1884年（明治17）12月25日出版，定価20銭，B3-531-853）

〈上越教育大学附属図書館（小山家文書）〉

39 田中義廉編輯『日本史略』全5巻（出版人内藤伝右衛門，発兌人東京同支店，1876年（明治9）9月1日版權免許，1877年（明治10）1月20日出版，1879年（明治12）2月19日再刻御届（巻一奥付），1879年（明治12）4月20日再版御届（巻五奥付），210.1/Ta84/1～5。巻二～四の奥付なし。巻五35丁が落丁していて，代わりに25丁が重複してついている）

40 田中義廉編輯『日本史略』続編全3巻（出版人内藤伝右衛門，売弘同支店，1877年（明治10）11月15日版權免許，1877年（明治10）12月出版，定価各巻20銭，巻三のみ1879年（明治12）1月出版とあり定価25銭とある。210.1/Ta84/続編1～3）

〈竹田進吾〉

41 田中義廉編輯『日本史略』巻一～四（出版人内藤伝右衛門，発兌人東京同支店内藤泰次郎，1876年（明治9）9月1日版權免許，1877年（明治10）1月20日出版，1879年（明治12）4月20日再版御届，1881年（明治14）9月1日3刻御届。巻三のみ奥付なし）

42 田中義廉編輯，高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』巻五，続編全3巻（内藤伝右衛門出版，1883年（明治16）12月15日版權免許，1884年（明治17）4月出版，定価各巻20銭，巻三のみ25銭）

〈玉川大学教育博物館〉

43 田中義廉編輯『日本史略』全5巻（内藤伝右衛門出版，同支店売弘，「紀元二千五百三十六年九月一日版權免許」，1877年（明治10）1月20日出版，分類登録番号321.51-A3451。奥付は巻五のみある）—玉川大学教育博物館の1988年版目録には未掲載。

44 田中義廉編輯『日本史略』巻二・四・五（内藤伝右衛門出版，同支店売弘，「紀元二千五百三十六年九月一日版權免許」，1877年（明治10）1月20日出版，目録通し番号941，分類登録番号321.51-A752。奥付は巻五のみある）

45 田中義廉編輯『日本史略』後編巻三（内藤伝右衛門出版，同支店売弘，1877年（明治10）11月15日版權免許，1879年（明治12）1月出版，定価25銭，目録通し番号942，分類登録番号321.51-A751）

〈筑波大学附属図書館新館古典資料事務室（宮木文庫）〉

46 田中義廉編輯『日本史略』巻一・二・三（出版人内藤伝右衛門，「紀元二千五百三十六年九月一日版權免許」，1877年（明治10）1月20日出版，宮木文庫，～300-宮166。3巻とも奥付あり）

47 田中義廉編輯，高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』続編全3巻（内藤伝右衛門，1883年（明治16）12月15日版權免許，1884年（明治17）4月出版，定価巻一・二20銭，巻三25銭，宮木文庫，～300-

宮 166。全巻奥付あり)

〈東京学芸大学附属図書館 (松浦文庫)〉

48 田中義廉編輯『日本史略』巻二 (内藤伝右衛門出版, 内藤泰次郎発兌, 1876年 (明治9) 9月1日版權免許, 1877年 (明治10) 1月20日出版, 1879年 (明治12) 4月20日再版御届, 1881年 (明治14) 9月1日3刻御届, 松浦文庫, T1A11/32.1/Ta 84)

49 田中義廉編輯『日本史略』巻五 (内藤伝右衛門出版, 同支店発兌, 1876年 (明治9) 9月1日版權免許, 1877年 (明治10) 1月20日出版, 1879年 (明治12) 4月20日再版御届, 松浦文庫, T1A11/32.1/Ta84。本文52丁が落丁していて, 53丁が2枚ついている)

〈東書文庫〉

50 田中義廉編輯『日本史略』全5巻, 続編全3巻 (出版人内藤伝右衛門, 巻五のみ発兌人として東京内藤伝右衛門支店が出てくる, 全5巻は1876年 (明治9) 9月1日版權免許, 1877年 (明治10) 1月20日出版, 1879年 (明治12) 4月20日再版御届, 1881年 (明治14) 9月1日三刻御届 (以上巻一〜四), 巻五のみ1876年 (明治9) 9月1日版權免許, 1877年 (明治10) 1月20日出版, 1879年 (明治12) 2月19日再版御届, 続編全3巻は1877年 (明治10) 11月15日版權免許, 1877年 (明治10) 12月出版 (巻一・二), 1879年 (明治12) 1月出版 (巻三), 1882年 (明治15) 5月25日二刻御届, 続編巻三の奥付に定価65銭とある (続編全3巻まとめたの定価であろう), 321/32-1。奥付は巻一〜五と続編巻三にある。全8冊の巻頭辺の丁に「岡山県国定教科書特約販売所殿寄贈」と朱で書かれている (枠と「殿寄贈」部分は朱印)。全8冊の巻末部分に昭和12年12月9日に寄贈されたことを示す朱印が押されている)

51 田中義廉編輯『日本史略』巻一・二 (巻一は内表紙に三刻とある, 巻二には内表紙も奥付もない, 321-32-1イ)

52 田中義廉編輯, 高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』全5巻, 続編全3巻 (内藤伝右衛門出版, 1883年 (明治16) 12月15日版權免許, 1884年 (明治17) 4月出版, 検定申請本, 定価各巻18銭 (各巻奥付の押紙状の紙に書かれている), 321-32-2。全8巻の表紙に「文部省図書課」における所蔵番号を示す紙が貼られている。この紙には原317号, 歴史類, 26函, 右ノ2架, 全8冊と記されている。「検」の印も押されている。この紙片には「消」の印が押してある。よって文部省旧蔵本であることがわかる。この全8巻には, 「辻橋」「登作」朱印が押されている付箋がある。全巻奥付がある) 一巻一・三・五・続編巻二の内表紙に内藤伝右衛門の広告があり, 『日本史略』は全8巻のうち, 巻二と続編巻三が除かれた形で宣伝されている。

53 田中義廉編輯, 高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』全5巻, 続編全3巻 (内藤伝右衛門出版, 東京府平民山添栄助発売, 1883年 (明治16) 12月15日版權免許, 1888年 (明治21) 1月11日訂正再版御届,

1888年(明治21)1月23日出版, 検定合格本, 定価各巻18銭, 321・32・3。全8巻の表紙に「文部省書庫」における所蔵番号を示す紙が貼られている。この紙には原189号, 20函, 6架, 歴29号, 全8冊と記されている。「検」の印も押されている。この紙片には「消」の印が押してある。よって文部省旧蔵本であることがわかる。(全巻奥付がある)

〈東北大学附属図書館本館〉

54 田中義廉編輯『日本史略』巻一・二・四(出版人内藤伝右衛門, 1876年(明治9)9月1日著作権免許, 1877年(明治10)1月20日出版, 1879年(明治12)4月20日再版御届, 1881年(明治14)9月1日3刻御届, II C/13/ニ2。3巻とも奥付がある)

55 田中義廉編輯, 高橋磯八郎校訂『改刻日本史略』巻三・五(出版人内藤伝右衛門, 1883年(明治16)12月15日著作権免許, 1884年(明治17)4月出版, 定価20銭(各巻の意だろう), II C/13/ニ2。2巻とも奥付がある)

〈新潟大学附属図書館中央館特殊資料室〉

56 田中義廉編輯『日本史略』全5巻(出版人内藤伝右衛門, 売弘所同支店, 「紀元二千五百三十六年九月一日著作権免許」, 1877年(明治10)1月20日出版, 奥付は巻五のみ, 210/Ta84/1~5。全5巻の表紙に朱で「第五号 イ号 共五冊 教員用」と書かれている。巻一表紙にのみ「昭和 年 月 日受付 7 類 第2号 共5冊」とある紙片が貼られている(下線部のみ筆記—竹田注)。全5巻とも題辞か目録部分に「新潟県第拾弍中学区第五小学区公立小学龍光校」の朱印が押されている。巻五のみ奥付あり)

〈山梨県立図書館〉

57 田中義廉編輯『日本史略』全5巻(出版人内藤伝右衛門, 「紀元式千五百三十六年第九月一日著作権免許」, 1877年(明治10)1月20日出版, 定価1円(全5巻での意だろう), 甲375.9・タナ-1~5。巻五のみ奥付あり)

〔付記〕田中義廉編『日本史略』『改刻日本史略』の閲覧・撮影等に関しては, 国立教育政策研究所教育研究情報センター教育図書館, 国立国会図書館, 駒ヶ根市立図書館竹村文庫, 上越教育大学附属図書館, 玉川大学教育博物館, 筑波大学附属図書館中央図書館, 東京学芸大学附属図書館, 東書文庫, 東北大学附属図書館, 新潟大学附属図書館, 山梨県立図書館甲州文庫を利用させていただいた。また, 田中義廉関係史料の閲覧・撮影等に関しては, 飯田市美術博物館を利用させていただいた。前記諸機関の関係者に感謝申し上げる。